

岡崎市議会議長 様

支出番号

会派名

公明党

代表者名

野島 さつき

下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

政 務 活 動 旅 行 報 告 書

令和 5年 1月 19日提出

活動年月日	令和4年10月13日（木）～令和4年10月14日（金）	
氏名	畑尻宣長・野島さつき・土谷直樹	
用務先 及び 内 容	1 10月 13日	用務先 長崎市：出島メッセ長崎
		内 容 第84回 全国都市問題会議
	2 10月 14日	用務先 長崎市：出島メッセ長崎
		内 容 第84回 全国都市問題会議
	3 月 日	用務先
		内 容
	4 月 日	用務先
		内 容
備 考		



政務活動調査報告書

受講日	令和4年10月13日（木）～10月14日（金）
研修場所	長崎市：出島メッセ長崎
講座名	『第84回 全国都市問題会議』 個性を活かして「選ばれる」まちづくり～何度も訪れたい場所になるために～
受講者名	畑尻宣長・野島さつき・土谷直樹
研修の内容	＜第1日＞ 開会式 基調講演・主報告 一般報告 ＜第2日＞ パネルディスカッション 閉会式

『第84回 全国都市問題会議』

個性を活かして「選ばれる」まちづくり
～何度も訪れたい場所になるために～

＜1日目＞



- ◆ 基調講演 「民間主導の地域創生の重要性」
株式会社ジャパネットホールディングス代表取締役社長兼 CEO 高田旭人氏
- ◆ 主報告 「長崎市の魅力あるまちづくり」 長崎県長崎市長 田上富久氏
- ◆ 一般報告 「地域との新しい関わり方・関係人口」
島根県立大学地域政策学部准教授 田中輝美氏
- ◆ 一般報告 「ビジョンを活かしたまちづくり～『選ばれる山形市』を目指して～」
山形県山形市長 佐藤孝弘氏

◆ 一般報告 「交流の産業化」を支える景観まちづくり～長崎市景観専門監の取り組み～

一般社団法人地域力創造デザインセンター代表理事 高尾忠志氏

<2日目>

◆ パネルディスカッション

【テーマ】

個性を活かして「選ばれる」まちづくり
～何度も訪れたい場所になるために～



【コーディネーター】	東京都立大学法学部教授	大杉 寛氏
【パネリスト】	ゆとり研究所所長	野口智子氏
	山梨大学生命環境学部教授	田中 敦氏
	NPO 法人長崎コンプラドール理事長	桐野耕一氏
	岐阜県飛騨市長	都竹淳也氏
	兵庫県伊丹市長	藤原保幸氏

<所 感>・・・畑尻宣長

基調講演の株式会社ジャパネットホールディングスの高田旭人代表取締役兼 CEO より話を伺いました。私のイメージは、ジャパネットたかたのテレビショッピング的なイメージしかありませんでした。時折、ニュースで先代社長の地元サッカーチームを応援していることが取り上げられ、目にする程度で、ジャパネットホールディングスとして力を入れている本質について、しっかり話が聞けたと感じています。これまで培ってきた「見つける」「磨く」「伝える」という方針を地域のために、地方創生として体现されています。プロサッカークラブを運営して、その方針を活かし、さらにはプロバスケットボールクラブも立ち上げられました。今まさに長崎スタジアムシティプロジェクトを進めているところです。それには、様々な民間ならではの工夫がちりばめられています。決して行政では、思いもつかない、また、実行することが出来ないような仕掛けが数多くあります。2024 年の開業を目指して進めています。地域の商業施設と競合しないように、また、地元の子供たちがスタジアムの天然芝を使用出来るようになる予定です。他のスタジアムでは、通常での使用は出来ません。さらにオフィススペースも併設することで、スタジアム施設を最大限活かせることで、地域の活性化に繋がると期待が膨らみます。こういった企業を育ててきたのも地元愛であると感じました。本市にも地元を愛する方がほとんどであると思います。地域創生を進められる企業風土を作れるような、受け止められるような行政でありたいと思いました。

次に、田上富久 長崎市長から主報告がありました。長崎市には歴史があります。その歴史をどう活かすのか、田上市長の市職員時代からの積み上げたものが、市政に反映されていると感じました。その一つに、「長崎さるく」というのがあります。長崎の町をぶらぶら歩くという意味です。観光課に所属していた時に、ぶらぶら見て歩けるように、歴史など、まちの魅力を発見し、発信するということを行ってきました。素通りのまちからストーリーのまちへと、新しい観光街歩きへと発展しました。本市にとっても大変参考になる事例と捉えています。歴史遺産の点から、面へとストーリー性を持たせるための工夫を考えさせられました。また、まちづくりに至っては、ネットワーク型コンパクトシティを目指していますが、決して都市部のレベルを落とさないということを基本にしています。どこに住んでいても、都市機能がいつでも使える、安全安心なまちづくりを進めています。田上市長の話聞いてると本市でも、まだまだやれることがたくさん残っていると感じました。ひとつひとつ本市なりのまちづくりについて、提案していきたいと思いました。

一般報告として、島根県立大学 地域政策学部の田中輝美准教授からは、「地域との新しい関わり方・関係人口」についてお聞きしました。人口減少にどう立ち向かうのか、という課題に対してのヒントにもなる話でした。関係人口として、「人口をシェアしよう」という発想で、「週末住人」としてイベントに参加したりする若者が、この鳥取をふるさとだと感じてもらうまでになる過程は、過疎化の歯止めになるのではないかと思います。そのヒントが、3点あります。一つ目は、「名前が覚えられる規模」二つ目は、「準備から片付け、打ち上げは一緒に行く」三つ目は、「住民の思いや背景を伝える」ということでした。ひとつひとつに意味があり、これが合致することで、そこに住む住民、地域に変化が現れ、若い世代が関心を持つようになり、新しい潮流へと流れ出すといった経緯をお聞きしました。額田地域での週末住人のような取り組みは大変興味深く、試してみる価値があると思いました。

次に、佐藤孝弘 山形市長からは「ビジョンを活かしたまちづくり」としてお聞きしました。山形市は「健康医療先進都市」「文化創造都市」の2大ビジョンで積極的に施策を展開されています。施策は本市でも行っていることが多く、なにか違いがあるとすると、市長の将来ビジョンと結び付けた各種政策を、市長部局全員に思いが伝わるよう研修を行っているようです。このビジョンをしっかりと理解した上で政策が進められていくことが大きく前進している結果に繋がっていると感じました。

最後に、一般社団法人地域力創造デザインセンター 高尾忠志 代表理事からは、「交流の産業化」を支える景観まちづくりとして、長崎市景観専門監の取り組みを教えてくださいました。これは、田上市長が「100年に一度のまちづくり」と呼ばれる大規模事業によって大きくまちが更新される時期を迎えるにあたり、より良いものにするために、一つ一つの事業の質、その質を高めるための一つ一つの協議、そこに関わる一人一人の働きが丁寧に積み重なっていくようなコーディネートが重要であるとの発想から景観専門監が取り入れられました。その代表的なものが、今回の会場にもなっている「出島メッセ長崎」であり、周辺の長崎街道かもめ市場、西口駅前広場などであります。高尾さんは、事業の縦割り、行政の縦割りを変えて、事業の目的を達成するために、担当者や関係者の与えられている範囲を超えて、最善を尽くすことを実践をもって教えているのだと感じました。出来上がった景観だけでは

判断できないもので、人材育成に大いに繋がっていると思いました。私たちの生活のうえでは様々な課題が山積しております。そういった課題にどう立ち向かい解決に導いていくのか、そういったヒントを得た事例でありました。

パネルディスカッションでは、「選ばれる」まちづくりに向けた都市自治体のアプローチとして、観光だけでなく、価値実現型のアプローチがあり、我がまちが選び続けられるまちづくりのヒントがあるとお聞きしました。本市においても多角的に政策を進めているようですが、違う角度からのアプローチも視野に入れるべきだと感じました。

ゆとり研究所の野口智子所長からは、人が人を磨き、輝く人が人を呼ぶとして、人とのつながりは、誰しも求めており、すでに地域おこしに頑張っている人はいる、その土地の人材を育成するべきだと言われていました。人と人が出会うことで新しいことが起きてくるとして展開されています。ふと地域を見渡すと、本市の中でも小単位の集まりはいくつもあります。今のうちに、手を加え、持続可能な、人が輝ける場の創出になるよう進めていきたいと思えます。

都竹淳也飛騨市長は、「人口減少先進地の挑戦」として、ファンと共に取り組むまちづくりを展開されています。私の生まれ故郷は、飛騨市の隣の高山市です。どれだけ田舎で、不便なのか、良く知る一人でもあります。そこで飛騨市ファンクラブを立ち上げ、魅力発信や現地に来てもらうなどの工夫を凝らし、関係人口増を図っています。大変、交通の便が悪い地域であります。どうやって魅力を作り出し、知ってもらい、リピーターになってもらえるのか、活動の模様をお聞きしました。ファンの方を中心に人の輪を広げていくことでの拡大は、一朝一夕には真似できませんが、本市に合った方法があるはずです。しっかり提案に結び付けていきたいと考えています。

今回のテーマは、「個性を活かして【選ばれる】まちづくり ～何度も訪れたい場所になるために～」でありました。本市ならではの、本市でしか味わえないものは、たくさんあります。これから、その資源をどう活かしていくのか、施策としての方向性を決めていく段階であると感じます。独自の発想と地域住民主体の施策を進めていけるよう提案して参りたいと思えます。

<所 感>・・・野島さつき

日本は、2000年代より人口減少社会となり、少子高齢化、労働人口の減少、地域経済の衰退など、様々な問題に直面しています。さらに、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが発生し、人の移動の自粛など人と「会う」「集まる」という当たり前の日常が奪われてしまい、経済活動の制限や個人消費の低迷など深刻な影響ももたらされました。その一方で、オンライン会議やテレワークの普及、勤労世代の地方移住の動きなど、働き方・住まい方の変化も見られるようになりました。そのような大きな時代の転換期をとらえ、将来的に移住・定住先としての選択肢になることを視野に入れながら、人が訪れ、集まり、交流する場所として選ばれるような個性を活かした魅力ある地域づくりについて考えることが求められています。今回の会議では、地理的条件や地域資源など、様々な都市の個性を活かした魅力あ

るまちづくりの取り組みを勉強させていただきました。

ジャパネットホールディングスの高田氏は、2024 年開業を目指す「長崎スタジアムシティプロジェクト」について、長崎市は人口の転出超過が多いことから、一度長崎から出て行ったとしても、将来戻ってきたときに、楽しみが増えるようなまちをつくれなにかの思いが原動力となっていると語られました。行政ではできない民間企業ならではの柔軟性とアイデアで地域を盛り上げていく気概を感じました。

長崎市長の田上氏は、元職員ということもあり、地域を良く知っていると感じました。「価値を見つける」「価値に気づく」「価値を磨く」「価値を生み出す」この4つの視点から、まちの「価値」を見つめ直す取り組みは、参考にしたいと思いました。

島根県立大学の田中准教授からは、担い手不足という課題に対し、「つながり」をつくることで立ち向かう可能性が示されました。鳥取市用瀬町の「週末住人s」、雲南市の「草刈り応援隊」、邑南町の「INAKAイルミ」の例を上げ、多世代が何度も通ってくるポイントとして、①名前が覚えられる規模（量より質）、②準備から片付け、打ち上げまで一緒に（脱・お客様は神様）、③住民の思いや背景も伝える（ストーリー化）があるといわれました。つながりがあるということが都会生まれの若い世代にとっては価値であり、資源となっているそうです。「よそ者」を歓迎できる地域が成功しているように感じました。

パネルディスカッションでは、「人が移動する」ときの選択基準は何なのか、幸せづくりを誰か一人がするのではなく、みんなでシェアしていく、その中での行政の役割は何か、という問題提起で議論が始まりました。桐野氏からは「長崎さるく」と「まちづくり」についての報告があり、普通の市民が「まち歩きガイド」となり、まちにやってきた人たちに思いっきり長崎自慢をしておもてなしをすることで、まちを見つめることができ、長崎を訪れた人が自分のまちを振り返るきっかけにもなり、他のまちの人々にも大きな影響を与えているとのことでした。ディスカッションを通し、「人は人に会いに行く」こと、訪問者を受け入れる地域の方々が育つこと、訪れた人もその土地によって育って帰るような、磨きあう関係が重要であることなどが共有されました。

本市においても、大河ドラマ「どうする家康」を機に多くの観光客が訪れると思われますが、「長崎さるく」のように受け入れ側がどれだけ心を開いてフレンドリーに対応できるかが重要と考えます。「岡崎の人にもう一度会いに行きたい」と思っていただけのようなおもてなしをしていきたいと思います。

<所 感>・・・土谷直樹

今回の第84回都市問題会議は「個性を活かして『選ばれる』まちづくり～何度も訪れたい場所になるために～」をテーマに行われました。

株式会社ジャパネットホールディングス代表取締役社長兼CEO 高田旭人氏による基調講演では、「民間主導の地域創生の重要性」と題して、地域を盛り上げるための民間企業の役割について、「長崎スタジアムシティプロジェクト」などを紹介し、長崎から大都市に出ていかななくても、幸せを感じられる仕事を生みだせるよう、また将来戻ってきたときに、

楽しみが増えるようなまちをつくれないうか。民間企業ならではのやり方で、空き時間と場所を有効活用しスタジアムシティ全体の「幸福の総量を最大化する」考えが紹介されました。民間企業のさまざまな知恵は地域の幸福力をアップしていくことを学ばせていただきました。本市の公民連携に活かしてまいりたいと思います。

長崎市長 田上富久氏による主報告では、「長崎市の魅力あるまちづくり」と題し、長崎市で進行中のさまざまなまちづくりの取組みを紹介。長崎は港を通じて交流をしながら発展してきたまちである。現在は、時代の変革期を迎えて「世紀の交流都市」に進化しようとしている。また、近年では価値観がますます多様化しており、新たな価値を求めて大都市から地方へと人の流れも生まれ始めている。長崎市では、「価値を見つける」「価値に気づく」「価値を磨く」「価値を生み出す」これらの4つの視点から、まちの「価値」を見つめ直す取組みが行われている、とのことでした。本市においても岡崎らしい岡崎にあった暮らし易さを目指したまちづくりを進めていくのに、4つの視点が非常に重要であると考えさせられました。

続いて一般報告がありました。

島根県立大学地域政策学部准教授 田中輝美氏による、「何度も訪れたくなる場所都市の新たな魅力と関係人口」と題した報告では、人口減少社会における担い手不足という課題に対し、「つながり」をつくることで立ち向かう可能性が示され、「名前が覚えられる規模で行う」「準備から片付け、打ち上げまで一緒に行う」「住民の思いや背景も伝える」ことで若い世代を含めた多世代が何度も通うようになる。東京生まれ、東京育ちの人たちは「ふるさと難民」となっており、つながりに憧れがある。地域を野球チームに例えると、関係人口は「助っ人外国人」であり、自分たちのチームの課題や戦力を把握した上で、力を合わせてチームをつくろうとすることが必要である、ということでした。本市においても、過疎地域は人口減少に直面しており、関係人口とのつながりにおいてしっかり学ばせていただきました。

続いて、山形市長 佐藤孝弘氏による「ビジョンを活かしたまちづくり～『選ばれる山形市』を目指して～」と題し、「健康医療先進都市」と「文化創造都市」という2大ビジョンに基づく「選ばれるまち」となるための政策の報告がありました。「健康医療先進都市」では市立病院と大学医学部との連携によって推進し、歩数によって「健康ポイント」がたまる事業では回遊性の高いまちづくりを進め、市民が楽しみながら歩く習慣を身に付けている。また、インクルーシブな屋内型児童遊戯施設もオープンしているとのことでした。「文化創造都市」に基づく山形国際ドキュメンタリー映画祭の開催されており、ビジョンを掲げた上で、それを具体化する事業・政策を次々と展開し、まちの個性がより濃くなるというステップが紹介されました。本市と似ている部分も多くあり大変参考になりました。

続いて、一般社団法人地域力創造デザインセンター代表理事 高尾忠志氏による『『交流の産業化』を支える景観まちづくり～長崎市景観専門監の取組み～』と題して報告が行われました。長崎市景観専門監の取組みは、公共事業デザインの指導・管理、職員の人材育成を行っている。長崎市での実例として、平和公園の改修工事では、過去の公園整備計画からデザインの意図を理解し工事を行い、鍋冠山公園展望台リニューアルでは、誰でも楽しめるスロープとしたこと。稲佐山電波塔ライトアップでは、観光客だけではなく、市民にとっても

誇れる日常風景となるようライトアッププログラムとしたこと。市の担当職員と景観専門監での現場確認・議論によって情報が共有され、一人一人の意識が高くなり、プロジェクトが良くなっていったと紹介されました。一つ一つの取組みが素晴らしく100年に一度のまちづくりを一体的に取組まれており、本市の都市計画に活かしてまいりたいと思います。

2日目は

東京都立大学法学部教授の大杉寛氏をコーディネーターとして、ゆとり研究所所長の野口智子氏、山梨大学生命環境学部教授の田中敦氏、NPO法人長崎コンプラドール理事長の桐野耕一氏、岐阜県飛騨市長の都竹淳也氏、兵庫県伊丹市長の藤原保幸氏によるパネルディスカッションが行われました。

はじめに大杉氏は、精神的欲求が変わってきた中で、単に幸せを感じられれば良いということではなく、幸せづくりをみんなでシェアしていく。その中での行政の役割は何か。との話をされました。

次に野口氏は、その土地に住む人、一人一人が育つことの重要性を指摘し、事例として、雲仙市における「雲仙人プロジェクト」と紀の川市における「フルーツツズム」を紹介した。

次に田中氏は、「合宿型」「サテライトオフィス型」「地域の課題解決型」など、自治体で「ワーケーションを推進する」という時に、誰を対象にするのかが難しい状況になっていることが指摘されました。

次に桐野氏は、「長崎さるく」では普通の市民が「まち歩きガイド」となり、長崎のまちに暮らしている人たちと一緒にまちを歩くことで、訪れた人が自分たちのまちを振り返るきっかけにもなり、大きな影響を与えているとの報告でした。

次に都竹市長は、関係人口の取組みにおいて飛騨市は「飛騨市ファンクラブ」を設立。会員が集まり交流する「飛騨市ファンの集い」が開催されており、活動を行う中で自主的に飛騨市に来て手伝いをする人が現れ始め、関係案内所「ヒダスケ」がスタート。人手不足解消もあり「飛騨を愛する方たちと出会えてうれしい」という報告がありました。

最後に藤原市長は、伊丹市民に、伊丹のまちに対して誇りと愛着を持ってもらうためのさまざまな取組みを報告。伊丹市にゆかりの深い著名人に、伊丹の良さをアピールしてもらう「伊丹大使」。「行きたい」まちに選ばれるためのイメージ戦略・PR戦略が紹介されました。

パネルディスカッションではさまざまな取組みが紹介され、「人は人に会いに行く」こと、訪問者を受け入れる側と、訪れた側、共に意識を高め充実感を得られる関係が大切であると勉強させていただきました。

今回の都市問題会議でのさまざまな報告を通し、本市においての地域に合わせた取組みの参考になりました。自分の暮らしている地域の個性を活かして「選ばれる」まちづくりができるよう提案していこうと思います。

以 上